

# 津高同窓会報

発行所  
津市新町3丁目1-1  
津高等学務  
同窓会事務局  
0592-28-0256  
共立印刷株式会社

## 歴史といまとの 接点を

学校長 袖野貞三



赴任の二あきつを前々号にかかせていた  
だいてから三年の月日が流れ、津高の水にす  
っかり馴染み、ひよつとすると、津高同窓生  
の一人のような錯覚を感じてしまつて、  
そして在校生によるこんでいただけの仕事

したいと思ひますし、ぜひ、残したいとの念  
願でございます。それも特色あり、個性の光  
ある仕事を賞賛であり、各位から、いろいろ  
ろとご命をいただいて、衆知の中から、み  
なさんのほんとうのお声を汲もうとおもつて  
います。  
おかげさまで、かねてご要望がございまし  
た新しい体育館が、ようやく予算化され、現  
任教職員など、みんなで検討を加えて、  
みることにになり、来年度中には、堂々たる新  
いものが、偉容をみせてくれることおほ  
います。  
ともすれば、現在の若者たちは、「伝統」

や「歴史」というようなことと断絶された  
ころで生活をしているような欠陥があるよう  
におもえて残念であり、津高教育の中でこそ  
歴史と現代の接点を追及し、結び合わせてゆ  
く課題を、毫も忘却し去つてはならぬと  
おもふ一人であります。  
ご同窓のみならず、とあるとき、折あるこ  
とに、母校の庭におたずねいただき、そびえ  
たつヒマラヤを眺めてくださった時は、母  
校の健在と、ご健康を共にかみめ、よろこ  
びあつたらうと思ひます。  
暑中お見舞いをおこし、ごあいさついたしま  
す。

# 体育館・武道館 同時建設へ！

### 県議会ですでに予算化

さる三月県議会で、津高体育館建設が予算  
化されました。まもなく、設計施工へと急じ  
つて話がはじまり、昭和五十九年度には新設  
された新体育館が偉容をみせることになりま  
す。同時に武道館も新築されます。  
新体育館建設問題はずいぶん、百年祭前  
は昭和二十九年十一月一日に落成式を行な  
っていますから、以来、三十年近く、津高生と

共により、あの体育館で、アセンブリがひら  
かれ、下駄ばき禁止反対など、議論が白熱し  
昭和三十七年十二月一日大火で教室を全焼し  
たときは、体育館が仕切られて教室に早があ  
りし、両隣りの授業をきながら、かつてな  
い抜群の成績をおさめたと、同窓生にとつ  
て忘れられぬ場所です。  
落成式のあった十一月一日を創立記念日に  
定め、いまお二八号までつづいている生  
誌誌「津」の創刊号は、この体育館落成記  
念出版として発行されたのでした。当初から  
設計図に舞台(ステージ)がないと主張さ  
れた米本先生、昭和四十二年三月三十一日、  
ステージの部分がつきはきされました。  
耐用年数はまだ少々あるようですが、老朽  
化がすすみ、新しく建てた他校のものに比し  
て規模も小さく、このたび第二体育館(武道  
場)と共にとりこまれ、同じ位置に新体育

館、武道館が目前に控えることになりました。  
大きな規模についても、高校体育館として  
の規格があるようですが、新町駅から近く地  
域社会のスポーツ要求にもこたえうる、パレ  
イコート四角が同時に可能である広さのもの  
をと母校では協議を重ねられています。また  
建設場所についても、通用門のあたり、プー  
ルの上へ、グラウンドの東など、審議の上、現  
在ある場所と内定しているようです。



以来30年、津高生と共にあった現在の体育館

ふるって参集ください。  
東京のつど  
い 三重めぐり  
午前十一時半から東京・青山のダ  
イヤモンドホテルでひらかれます。  
天野清子さんのほうへご出席の  
方はご連絡いただければさいわい  
です。なおごしは昭和三年卒の  
方々がお世話をしていたとき、会  
費は五〇〇円です。今村房さん  
も、かっつけてくださる予定です。  
次は予告ですが、三重まぐら東  
京部会は、本年、九月二十七日(火)

岩田川レガッタ  
九月四日(日)  
ポイント部Oの会津高船友会  
主催の恒例の岩田川レガッタの準  
備がすすんでいます。開会は十時  
からです。むかしなつかしい波津  
々の阿津浦、岩田川下側堤防、  
津高艇庫前にお出かけください。

津高大阪同窓会  
十一月十三日(日)  
阪神百貨店十一時より  
九階グリーンルーム

## 総会成功へ年度幹事会ひらく

### 自由にお出かけください

まりました。この代議員制は、お一人でも  
多くの方に総会にご出席いただきたいに  
考えました。決して自由な参加を  
しめようとするものではありません。  
これまで、ともすれば、若し世代の方々のご  
出席がかなばりませんでした。同窓会  
総会がもつと若やくために考えた若やくの策

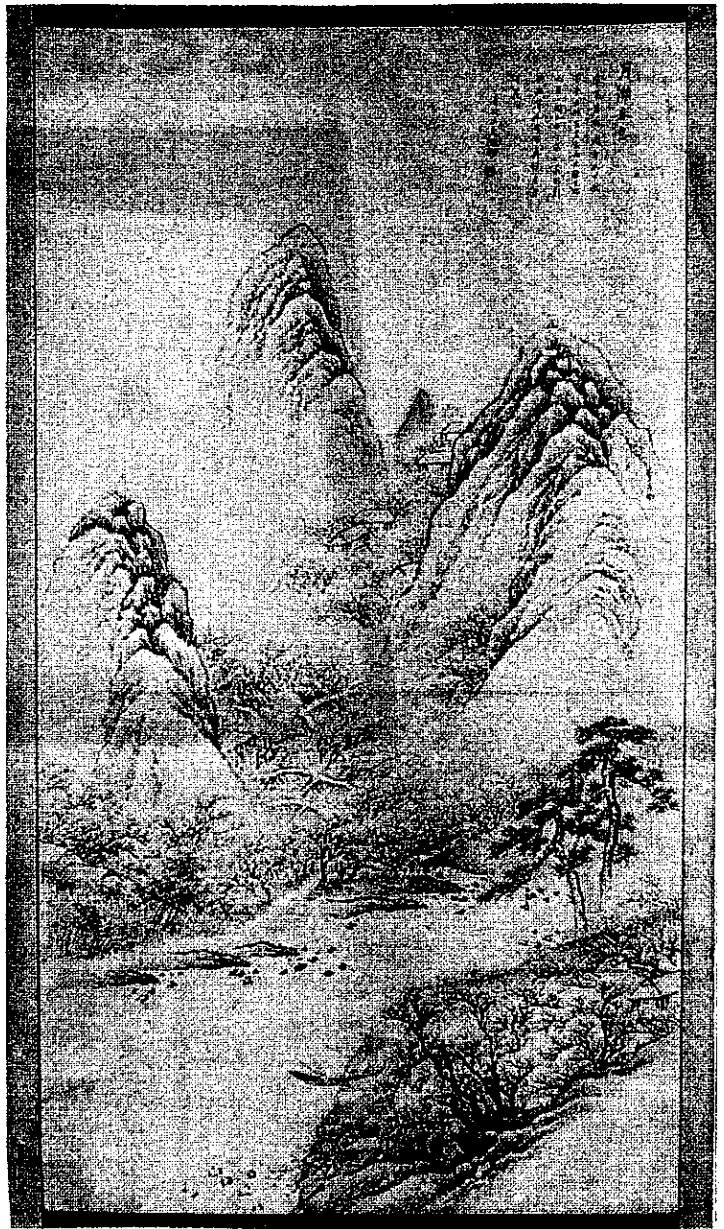
です。意のあるところ、お汲みいただい  
て、この制度にこだわらず、それぞれ自由  
にお気軽にごとお集まりいただくようおね  
がいをします。  
ちなみに去年の総会には、津高卒の若い方  
々が大勢お集まりいただき、これまでとかわ

つた新鮮な空気が会場を流れ、たがい久  
を叙し、交歓し合うことができた。いう  
までもないことですが、同窓会は、まったく  
自由で任意な集りです。いかなる枠組みもな  
く、互いに同等であり、自由そのものでな  
ければ同窓会は雲散霧消するでしょう。七日  
日には、ぜひ、いままでご予定いただき、せ  
集りください。

三重桜部会  
総会ひらく  
さる四月十七日、久居市神原  
で三重まぐら部会の五十八年度総  
会が二〇〇八名の参加をえて、盛  
大にひらかれました。八ページの

写真をごらんください。  
鈴鹿市から「杉野はすこ」で  
みなさんごぞんじの杉野兵衛長の  
むすめさん(八〇歳)もかけつけ  
てくださいました。  
五十九年度、同窓会は八ページに  
もご紹介しましたように四月二十  
二日、洞津会館と決っています。





宮崎青谷の『月瀬春意』 津市片田志袋に歯科医を開業している宮崎実氏(昭20年卒)は青谷の末裔。青谷の画は有名であり、画のような詩をかいた。実氏もまた画家であり、診療忙中、キャンパスを立てて画筆を持つ。

# 拙堂と東陽

ともに津藩の代表的学者である。東陽は(一七五七〜一八二五)拙堂は(一七九七〜一八六九)いまより一世紀半のむかし。右の大幅を画いた宮崎青谷(一八一〜一八六六)もまた学者であり、拙堂といっしょに月瀬に

遊び、一流画人であった。三人の家系にある人々が、わが同窓生であられること、ごそんじでしょうか。とくにおながいしてご寄稿ねがった。思いはるかに、津藩の隆昌と切り結ぶことにしては。

## 斎藤拙堂について

昭和23年卒 斎藤 正和



文は人なりといわれるが、拙堂はどんな人であったのだろうか。伝記によると大きな耳が偉え、痘痕面で、対談中、白眼をもって相手をシロリと見、ズケズケ直言してはばからなかつたという。こわい先生という感じであるが、交友範囲はきわめて広く、敵は意外に少なかつたようである。友人のなかには、大塩平八郎や渡辺華山のような異色の人物もいる。

いわゆる道学者ではなく「芸に遊ぶ」という句をのんだように、深川墨齋夫妻、女流詩人馬細江をはじめ、有名無名の文人詩人と酒を飲み交し詩作をたのしむ教養人であった。司馬遼太郎の「峠」は越後長岡藩で明治維新直前に家老をつとめたユニークな政治家で拙堂の弟子でもあった河井継之助を主人公にした小説であるが、そのなかで、作者は主人公の口を借りて、旧師である拙堂を「偉大ではあるが乱世の雄にはなりえない」とか「先生には思想がない、思想がないから先が見えない」と批評している。

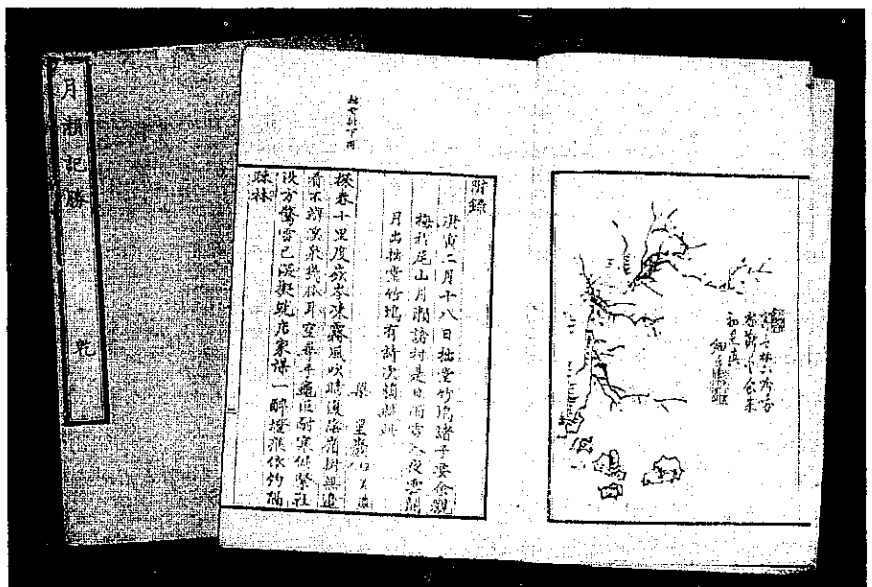
果して思想がなかつたのだろうか、拙大な思想体系はなかつたかも知れない。討幕の革命イデオログでなかつたことも確かである。だが、拙堂の本領はやはり政治家としてのそれではなかつたかと思ふ。黒船がくるや、いち早く海外事情を調査して、国防に関する多くの著述を行うとともに、藩校に洋学、洋式教練をとり入れ、また、種痘を普及させるために率先して接種を試験台にするなど、啓蒙家の面目躍如たるものがある。

明治維新に際して津藩がとつた態度は暖昧であつて、拙堂の指導力が發揮されていまい。嫌いがある。しかし薩長が公使を利用して、天下をわがものにするにすぎない維新など、到底、支持する気になれなかつたのではないかと思ふ。拙堂の考えた善学真はもつと別のものであつたにちがいないと思ふのは身も膚にもすぎらうか。

維新前後のあわただしい慶応元年、拙堂は六十九歳でこの世を去る。息子の正格(誠軒と号す)も有造塾最後の督学になつてた。しかしこの二代目は明治九年、五十一歳で若

以後、売り食いの生活にはいるのである。拙堂が晩年に隠居所とした茶屋山荘(現在の鳥屋町にあつた)は、明治になつて鉄道が敷かれるとき立退きの憂きめに逢つた。全国から著名文人、政治家、たとえば吉田陰などが来訪し、四季折々に詩会が催された山荘も、いまは世田谷権の画く一幅の文人画によつて往時を憶ふしかない。

遺品の多くは明治以後人手に渡つたり、第二次大戦中、戦災で失われたりしたが、残されたものを大切に保存、収集し、郷土の文化的遺産として後世に伝えたい。未刊の詩集の原稿が私の手許に残っているので、いずれ詩人としての拙堂の全貌も明らかにしたいと思つてゐる。



いまから百五十年ほど前、津に齋藤拙堂という漢学者がいた。私の祖父の祖父、即ち高祖父である。私は漢学については全くの素人であり、拙堂を批評する資格はないが、以前から拙堂は、わが郷土、三重県の高津へき学者であるとの評価を受けているので、地方文化の向上が叫ばれるころに、ちか、事績をふりかえってみるのも意味あることと想う。

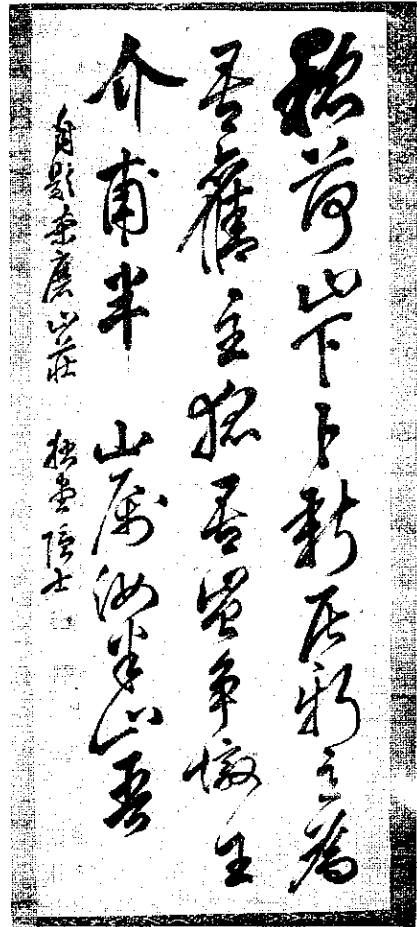
江戸時代はこゝろにちより、もつと地方の時代であり、全国各地に、江戸の學校に負けない漢校があった。わが津高の漢流をなす津藩校有造館もその代表的なものであった。有造館の第二代理督(学長)をつとめた齋藤拙堂は、時の將軍家定から昌平校の講堂教授にならう求められたころ、藤室藩主に恩義があるとの理由でことわつていたのである。これをもつても有造館のレベルが、如何に高かっかがわかる。拙堂の文章には郷土を素材としたものが多く、彼こそは伊勢文化の担い手であった。

拙堂は、儒学者として一流であつたほか、

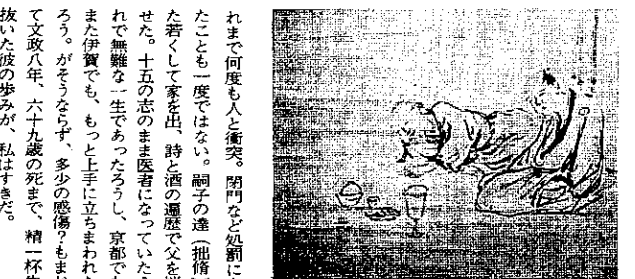
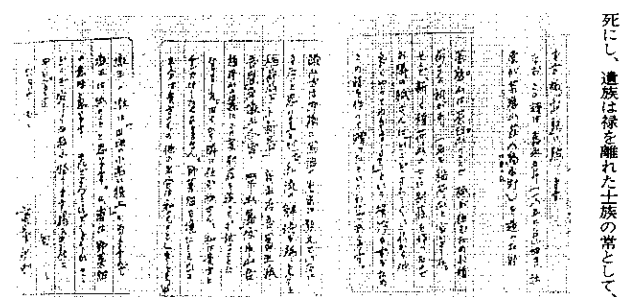
行政官、政治顧問、学校経営者、文人、詩人として幅広い活動をしている。ここに文章にすぐれ、日瀬海漢を世に紹介した「行天文月瀧記勝」などは、当時のいわばベストセラー一冊であつた。二十四歳のとき、当時すでに天下に名を成していた十七歳年長の頼山陽を京都に呼びよせるが、はじめ、拙堂を小僧扱い

していた山陽が、拙堂の文章を見るや態度を改め、朋友の礼をもつて遇したといわれる。以前の中等学校には漢文の時間あつて、拙堂の文章もかんに教えてくれた。それらの文章はいわゆる美文であつて、こゝろに、あまり好まれないうが、蘭漢で、力よく、リズムミカルな表現は捨て難いものがある。

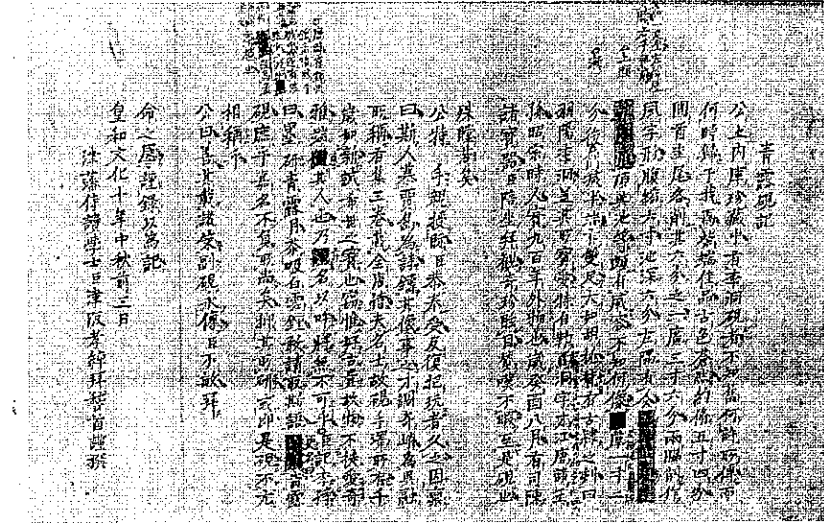
しかし思想なしで文章が書けるものではなからう。拙堂三十四歳の年に刊行した「拙堂文話」は、当時、中国で発表された文獻まで広く読みこなし、中国、日本の古今の文学を論じた文学論であるが、これなどは当時最新で最高レベルの労作であつたばかりでなく、こゝろにちでもしばしばその卓見が引用される名



山崎新太郎 拙堂山下と新居新を為



晩年の拙堂と息子の誠軒 (画家・池田雲樵の)



津坂治男氏所蔵の「青露硯記」。東陽五十七歳の作、文字は拙簡のものともいわれる。

このころ、先祖 津阪東陽(諱孝純)のことを調べて下さる方があててきている。先日も千歳山に公園をひらいた際の記文(予定した碑は建てられずに終わった)の全文について、九州の研究家から県立図書館に問い合わせがあった。今年初めには、詩吟のテキストの「絶句類選(東陽編)」の口語訳のために「夜航詩話」なども参考にしたが、持ち合わせでないかと、これは同じ町の知人から聞かれた。三年ほど前には、大阪府在住の会社員K氏がたびたび手紙をよこされ、また二度ほど兼津、四天王寺の墓地を、あちこち実地にみられた。

戦後、台湾で復刻された「杜律詳解」など、東陽の書物は手に入るかぎりほとんど集めておられる。十年ばかり前には皇学館大学の女子学生が卒論のテーマに選んでくれた。三十三歳で藤室藩に儒者として召し抱えられてから十九歳で死ぬまで、こゝろの後半、伊賀から津に招かれてからの十数年間は、もっぱら教育や治世の仕事にかかりきりだったが、そのいわば公務のあいまに果たした杜南研究の厚味に私はひかれる。

「杜律詳解」一七言律詩にがまぐわしく詳解した全三巻のその書について、浅学の私は、かつての土岐藩や戦後の吉川幸次郎の文章(杜南詩注など)で知るばかりだが、NHKの中国向け海外放送でも紹介された聞いたりするにつけ、いつか目を見て読み通したい気持ちがますますつよくなる。杜詩については他に「夜航詩話」「夜航余話」などもよめられているようで、わが先祖の軌跡を

たどるのも並大抵の業ではなさそうだが、加えて、「天孝要領」(天文)、「訳筆笑話」(説話類)など、いわば儒学の神から自ずとはみ出た書もあり、「童女庭訓」「鶴陽子古録」などとおわせて、東陽の人間幅の広さを表している。

一方、晩年は大成したが、それに至る道もろとも焼失。後、津藩に召されたものの、赴任した伊賀では十九年、ほとんど容れられず。五十一歳ようやく津城へ出仕、六十三の年、藩校有造館の初代督学となる。しかしそ

れまで何度も人と衝突。閉門など処罰にあつたこと一度ではない。嗣子の達 拙簡(また若くして家を出、時と酒の過飲で父を悩ませた。十五の志のまま医者になつていたら、それで無難な一生であつたらうし、京都でも、また伊賀でも、もつと上手に立ちまわられたらう。がそうならず、多少の感傷もまじえて文政八年、六十九歳の死まで、精一杯生き抜いた彼の歩みは、私はすばらしい。

ところで、「夜航詩話」中に東陽が、一時、和歌で身を立てようとしたことをほのめかす部分があるが、前述K氏の便りにあつた。女子教育のため古歌を選んで音楽を加えた「童女庭訓」改題「道楽折歌合」のある所以だと、東陽はまた伊賀での不遇時代、漢詩を歌しては自ら慰めたといふ、詩集二冊(写本)がある。このように、自身、歌や詩の作者であつたからこそ、杜南たちの詩についても後世に残る評釈をすることができたのではないかと、自分では詩人となつたことを嫌つたといふ(「詩賦は未だなり」という言葉もある)。あくまで学問を第一にしていたからであるが、これも一つの立場であらう。少なくとも、研究(学問)と、詩など著作との双方にかかわりながら、どちらも、東陽津城出仕の年齢を超えながら遺すものを持たない私にとつては胸を刺される思いの生き方は、ある。

さて、少年代代座敷に「皇和通紀・序」の扁額がかつていた記憶があるが、戦災で焼けてしまひ、いまはない。写真の「青露硯記」は東陽五十七歳の作だが、字は拙簡(達)のものではないかともいわれる。他に反古若干、それに七言絶句の草稿を二、二あるが、確信はない。





1、コロブチカへの誘い

津高の通用門をはいると、校舎は変わって... すが、その東の体育館が昔のまま。多くのひとがここで青春の汗を流したり、入学式、アセンブリー、講演、表彰を経験しました。二世のPTAで集まった方も相当。私には、このフロアで、当時、三年生だった女生徒の数人にオクラホマミキサーを教わった経験など。一九五六年春。もう二十七年の昔。いまでも時おり踊ります。若いパートナーに「母さんお元気？」ときさやいたり、「うちの伯父さん知ってる？」といわれたりしながら。

梢を仰いで... 竹田友三



2、沈む日によせて

た。出世しようがすまいが一列平等に黙談できるのが同窓会や母校のあたたかき。一度、ほんとにいらつしやいませんか。実はこの体育館、ことして解体されて新しくなるのです。お名残りのコロブチカをこのフロアで踊りませんか。という私自身が、くる春には津高を去ります。「定年」とかで。

多くの友は戦雲に乗ってわだつみの果てに消えました。その校舎が空襲で焼けたこと、親友を失ったことは何度か話したり書いたりしました。記憶しててくださいませ。久居兵舎で発足した新制津高第一年に新教師。学校とともにここに戻ってきた頃は、朝鮮戦争の記憶と重なって来ます。安宿の年まで旧校舎です。さまたまな仮装行列がのそりのそり歩いた思い出。いまは住宅に囲まれてしまつて半田山につづく菜の花畑もみえませんが、かわりに百年祭記念館が建っています。

西の方、理科棟と図書館の谷間に、残骸す

3、怒とやいうべき

前日の旧図書館がまだのこつています。ロマンラン友の会も杜研部もいまはなく、あの小出節も聞こえない。この本館は東高で「健勝」校舎に入ると、どの教室の黒板にも数式がいっぱい。廊下には東大用夏期講習、関関同立型模試等々、予備校のポスター。「民主的で文化的な国家を建設して世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意」(教育基本法前文)は津高のどこかに生きて

客観的には失敗ばかりしてき、結局、民主教育の確立などできなくて、まじめにいえば多くの教え子諸君を傷つけたい。斜めにいえば滑稽な徒勞の一生みたいだつたけど。しかしあんまり後悔はせん。自由と平和の虹を追って、若い人たちの、そして若い人どうしの、ヒューマンなふれあいを紡いで来たことを信じよう。その上さ、自身が若い人を愛した以上に若い人の信頼に支えられてきたことを有難いと思わねば。人は自ら愛することをもつと自体でしあわせであるうに、そのものに愛されることが少しでもあれば涙をがしていい。私は、戦火の地で出会ってから、若い人といつしよに生きてきた。若い人の苦しんでいる時に、若いこんでおいな

非行とか暴力とかからみれば津高は暴風圏外。掃除のサボなど多少のだからしなご程度。しかし、進学校のご多分にもれず秀才なのか神経症なのかごちからいとおかしい方はかなり。そういふ生徒の一号館から三階の露天通路を本館に渡ると、すぐかかりに相談室という暗い室があり、ここ数年、先任の長沢哲史さんの去られたままの室で、津高生の、時に父母の悩みを承っています。客観的には何の効果もないご同居仕事で、それすら八割は失敗ですが、主観的には、今日のな問題にもみぬかれていますご結構忙しい。

ほんとい一度、コロブチカを踊りませんか。校内の大きな樹と、青空とを望みながら。お待ちしています。

柳山のいちようのこと



私教師より自身、いかにもいい加減であり来たことと後悔することばかり。ミスばかりの出題、採点、八方破れの板書や話し方、この生徒には、のめりこんで過干渉ごちの方の訴えをろくに聞かず、更に深いのはその底の自身の浅薄さ、教育姿勢のあやふやさ。で、同期会などに招かれ「恩師」の上座にすえられると、「怒師なんですよ」とついいわずにおれません。しかし、教育条件などの問題もあるし、教師つて多少は道徳的要素もあるものというごでかんべんしてください。

三重さぐらの友にとつてなつかしい柳山も、すでに校舎がとりこわされて鉄筋の津高、県立幼稚園教員養成所が建ち、すっかり様子がかわりました。運動場にそり立ち、その蔭で憩うた銀杏の大木も、グラウンドが広くつかえるようになって、一昨年、切り倒されてしまいました。せめてその苗木を育てて新町の現津高に移植しては、昭和二十七年卒の橋本貞郎さん(現・草の実学園事務次長)らが種子を発芽させ、写真のように育っています。また親木を製材して、ついでに、にしてくださいます。まもなく、津高玄関に飾られることになっています。

4、給婆の語ること

柳山から津高初期の方におあいするとよく聞いていたごで、綾子のおパンも、来年教職を去る日を控えて、カブにヘルメット姿で、嵐の中学校のワルガキ諸君と元気に鬼ごっこしているごをご報告しておきます。その婆さんと語るご

また親木を製材して、ついでに、にしてくださいます。まもなく、津高玄関に飾られることになっています。



一号館、二号館 理科棟をむすぶ渡り廊下にて

# 色あせた四枚の写真手がかりに

## 昭和21年県立津高女入学者名簿で見る

昭和21年入学 阪 君江

一九四六年、まさに混沌の時代でした。永い戦争が敗戦というかたちで終結しその翌年、私たちは三重県立津高女高等学校に入學しました。川制最後の女学生でした。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

その混沌の中で時代の波におし流され、学校を、校舎を、転々として高校生活を過ごしたことが、三十二年の暮暮を境に今日、勉学の思い出より鮮やかに胸に残っています。

ぼくら  
重い足どりで  
門をくぐる  
元氣よくだの  
胸ふくらませてだの  
いつちやいけな  
いっくら  
重い足どりで  
門をくぐる  
赤、青、黄、  
一五〇〇の  
色どりを守るとき  
おおぜいは  
うつくしいことを  
知っているだろうか  
信じているだろうか  
(あゝ、母校より)

## 三重テレビで紹介 放送クラブ編集の『津高』

さる七月十五日、午後五時から五時二〇分まで、津高放送部馬路武部長が、顧問の福江克明氏(昭和31年卒)の指導のもとに制作した『津高』が、三重テレビの学校紹介番組で放映されました。

創立百年記念誌「あゝ、母校」のさいごのページに出ている詩(上、参照)をテーマに編集されたもので、同誌や百年祭記録集から抜粋しながら、現在にいたるまでの「津高」を紹介したものです。ナレーションは二年生の中本久恵、宮本美佐穂の両嬢がとめてくれました。



長崎 未知生

## 『あゝ、母校』と回想



長崎 未知生

朝の花咲く東海の  
男子の群を眺めよ……  
校庭に集あつたわたしたちに、毎日のように教えてくれた上級生。大声を張りあげたわたしたち。あのひとこまは、三十五年過ぎた今も、胸に残り、校歌・祭歌・応援歌、凱歌の旋律が、そして、歌詩が声となつてくるのです。

この度の「あゝ、母校」編集という事業ほんとうにご苦労なものでした。終戦の混乱期、学制改革のため、松阪をはじめ各地に追い返されるという不安定な中学・高校時代を過ごしたわたしたちも、やっと陳川の名簿に加えられ、母校でできた喜びを味わっています。

昭和二十年四月、津中(三重一中)に

## 正門前のデコボコ道解消へ

正門前道路の両側に幅わっているヒマヤシダーは、かつては津中、津高を象徴する一つの眺めでした。附近に住宅が建ち並び、さいきはあまり目立たなくなりましたが、ヒマヤシダーを背景にのぞんだ津中の玄関は同窓生にとって忘れられせん。

去年も、異様なほどに発生した大毛虫が、ヒマヤシダーの葉を喰いつくし、あわや、立ち枯れ寸前になりましたが、消毒など、応急の手当てがよみましたが、ことは元気が吹き返したところ、ところが、玄関前道路が、市道か、県道か、長いあいだわからずのまま、改修がおくれ、舗装がいたんでいました。この道路は国の管轄がたがらうので、このほど、関係筋の理解が大がかりな改修の目途がたち、両脇に石組みなどもして正門らしく整備されるのもまた近かだと、耳よりな便りを聞いています。

あると報告

話はかわりますが、昭和三十年頃、ある津高生の話。なぜか、西側のヒマヤシダーが、台風のためによく倒れ、根入学、それは、ほんちに嬉しく、名簿なことでもあったのです。しかし、それも東の間の、戦況悪化により教練がふえ、夜昼なしの空襲警報。学習どころではない毎日が続きました。交通機関の麻痺のため線路一たいに歩いて松阪まで帰ることが多くなりました。雲出川にかかる鉄橋を這いながら渡ったことや、艦載機やグラマの果敢で、電車の下に潜り込んだことが度々ありました。そして七月、期末テストの期間中の夜半、母校の校舎は、灰にされてしまいました。

終戦後は、校舎のない学校へ満員電車に苦しみながら通学し、焼け跡のかたづけや運動場でのいも作り、午前中を過ぎ、午後には小学校を借りての授業という毎日でした。天井が破れて、大勢の上級生が降ってきたのも、その頃でした。

久居の兵舎に移った後のある日、松阪駅を出た電車が炎上し、津工生の友達も焼死するという事故がありました。騒ぎ

「新しい学校に行っても、ラクビー部に入部しないぞ」  
と、誓い合つて別れた若い日の姿が、よみがえりてくるのです。  
奮ひて起つてや時は今ぞ  
奮ひて起つてや時は今ぞ  
百年の歴史を築いてきた陳川。わたしは今その会員の一人として、また、松阪に戻された仲間一人としてお礼を申し上げるべく奇矯いたしました次第です。



写真は今年の三重桜総会

おしらせ  
59年度 三重桜総会  
とき 来年 4月22日(日)  
ところ 河津会館 (津新町駅西)  
詳細は日が近づいてから幹事のみなさんに連絡いたします。